

聖書：創世記2：18～25

説教題：ふたりは一体

日時：2019年9月8日（夕拝）

創世記1章27節に「神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。」とあって、そこを読む限り、男と女は同時に創造されたようにも読めました。しかし2章4節以降、人間の創造が改めて別角度から記されていますが、今日の箇所を通して男女の創造は一緒ではなかったということを私たちは知ります。初めに男が造られ、その後で女が造られました。なぜ神はそのようにされたのでしょうか。初めにアダム一人を造って見たが、一人ではさみしそうだから、女も造られたということでしょうか。そうではないでしょうか。この男女の創造の経緯に、結婚に関する、また男女に関する、神の御心が示されています。ここから結婚とは何か、また男とは何か、女とは何か、について大切な真理を学ぶことができます。

まずその結婚の準備として、神である主はアダムのところにあらゆる動物を連れて来られました。そして彼にその名をつけさせました。これは1章28節の、人間に与えられたいわゆる「文化命令」と関係します。人間は神のかたちとして、この世界を神の御心に沿って管理し、治める使命が与えられました。この責任を果たすためには、この世界にあるものを良く知って行かなければなりません。名は実体を現します。ですからアダムはただ適当にそれぞれの動物に呼び名をつけたのではなく、その性質、その特徴を見事に言い当てる名前を付けて行ったのです。そのことを通してこの世界をより良く管理し、治める働きをして行くように導かれたのです。この作業は彼にとってどんなに神への賛美が炸裂せずにいない時だったのでしょうか。造られたもの一つ一つには創造者なる神の知恵と力が刻印されています。アダムはそれら一つ一つを丹念に調べ、観察し、共に過ごすことを通して、神のみわざに驚嘆せずにいられなかったことと思います。その被造物の美しさ、優美さ、不思議さ、楽しさ、多様さ、などを見つめて。

しかしその作業が終わった時の一抹の寂しさが20節にこう記されています。「人はすべての家畜、空の鳥、すべての野の獣に名をつけた。しかし、アダムには、ふさわしい助け手が見つからなかった。」自分の「上」には創造者なる神がおられ、自分の「下」には治めるべき動物たちがいましたが、自分の「横」にいて、一緒に歩む存在がいない。同じ立場で分かち合ったり、人格的交流をする相手がいない。神は女を創造するにあた

って、このようなプロセスをアダムに踏ませたのです。

神はアダムに深い眠りを下されました。そして彼からあばら骨の一つを取り、そのところを肉でふさがれました。そしてその一つのあばら骨から一人の女を造り上げた、と22節に記されます。そしてその彼女をアダムのところへ連れて来ました。眠りから覚めたアダムがどれほど喜びにあふれて彼女を迎え入れたかは、その彼が歌った言葉の中に生き生きと示されています。23節：「人は言った。『これこそ、ついに私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。男から取られたのだから。』」

アダムは眠りから覚めた時に、第二の自分とも言うべき存在が自らの傍らに立っているのを発見しました。彼はすべての生き物に名前を付ける作業を通して、本当の意味で自分を分かち合える存在を強く求めるように導かれていたでしょうが、「ついに」「とうとう」その求めていた存在を見つけた！という彼の喜びようが、「これこそ、ついに」という最初の叫びの中に現されています。それに続く「私の骨からの骨、私の肉からの肉」という表現は、彼女が自分と区別して考えることができないほどの存在、まるで自分の分身、いや自分自身そのものと言っても過言ではないほどの存在として彼が感じ取ったことを示しています。そのことは「女」という彼が名付けた名にも見ることができます。23節の「女」と「男」には、それぞれ印がついていて、欄外の注を見ると、男はヘブル語でイーシュ、女はイシャーであることが示されています。つまりアダムは自分と等しい存在として彼女を認めたからこそ、自分とほとんど同じ「イシャー」という言葉をもって彼女の存在を言い表したのです。

この出来事は結婚に関する神の御心を示すものであることが24節からも分かります。そこに「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結び合い、云々」とあります。アダムとエバには人間の父と母はいませんでしたから、これは彼らのことだけを言い表した言葉であるはずがありません。むしろこれはこの後に続く、人類の結婚の基礎になることとして、このようにここに記されていると言えます。

最後25節に「そのとき、人とその妻はふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった。」とあります。罪が入る前の人間は、自分を恥ずかしいと思うことはありませんでした。誰かに何かを隠す必要はありませんでした。お互いに対してすべてが開かれており、その交わりを妨げるものは何もありませんでした。当時の二人の間には、

このようなこの上ない喜びと安心と幸せとがあったのです。

さて以上の箇所から結婚について大きく二つのことを学ぶことができます。一つ目は男と女は違う存在であるということです。創世記1章では、どちらも神のかたちとして造られたとだけ言われていて、何の区別も示唆されていませんでした。どちらも神ご自身を鏡で映し出す存在として造られ、同じように尊い存在です。どちらかがより勝っていて、どちらかがより劣っているということはありません。しかしそのあまり、男と女も全く同じとすることは聖書の主張するところではありません。

では具体的に神が男と女それぞれに定めている違いとは何でしょうか。まず女について神は18節でこう表現しています。「人がひとりであるのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう。」ここに「ふさわしい助け手」という表現が出て来ます。これは20節でも繰り返されています。「ふさわしい」という言葉は「彼に差し向かいの」とか「彼の正面にいる」という意味です。すなわち「彼と向かい合って、彼と対をなす」という意味です。女はそういう意味で男のパートナーであり、彼の欠けを補い、完成させる存在です。これは決して逆には使われません。男が女のふさわしい助け手であるとは言われません。ここに神が女に対して持っている目的、女に与えている役割、特性が示されています。

では男についてはどうでしょうか。今見た、「女が助け手である」ということからすれば、男が「主」であること、新約聖書の表現で言えば、男が「かしら」であることが分かります。それは男女が造られた順序からも言えます。また今日の箇所のアダムとエバの行動からも分かります。ここでアダムが彼女に出会った時、彼が彼女を「女」と名付けました。名をつけたということは、その者に権威が与えられているということです。彼は彼女を発見した時に「あなたは何という被造物ですか」と尋ねませんでした。「これからどっちがリーダーシップを取ることにしましょうか」と相談しませんでした。彼は彼女を自分と同じ存在として見つめつつも、彼が彼女を「イシャー」と名付けました。また女もそのように名を付けられた時、アダムに向かって、「なぜあなたが私に名をつけるのですか」とか、「誰がそのような権威をあなたに与えたのですか」とは抗議しませんでした。むしろ自然のこととしてこれを受け入れました。ここに男女の関係における神の御心が明らかにされています。男も女も神の前に全く平等であり、同等の存在ですが、神はこのように違う役割と位置づけを持つ存在として造られたのです。これは創

造における神の定めであって、罪に落ちた私たちが救われるということは、本来のこの神の御心に沿う歩みに立ち戻って行くことを含みます。私たちは人間の考えによって行動するのでなく、聖書に聞き、神のデザインに沿った生き方へと回復させられて行くべきです。そしてそこにそのように造られている者たちの真の幸いと喜びがあるのです。

もう一つ、結婚について学ぶことは「ふたりは一体」と言われていることです。神は女を創造する際、アダムのあばら骨の一つを取って、それから彼女を造られました。アダムと別に新しい素材を用いて造ったものではありませんでした。ここに男と女が同質、同等の存在である根拠があります。しかしそれ以上にここに示されている真理は、二人はもともと一人だったということです。結婚はもともと別々の存在であった人たちが、何とかうまく合わせて一人の人のようになるとうとすることではありません。そうではなく、もとは一つであった男女が、再び一つになって、一つのからだを形成して行くのです。

結婚はそのような特別な意味での一体の関係なので、親子関係にまさるといことが24節で述べられています。これは親子の肉のつながりの方が強いと考える古代世界においては、びっくり仰天させられずにいない宣言です。もちろんこれは親を軽んじて良いとか、核家族を勧める言葉ではありません。聖書では十戒の隣人愛のトップに「あなたの父と母を敬え」とまず言われています。しかし親と子を指して、「ふたりは一体」とは言いません。身内や親族を指して「骨肉」と呼ぶ表現は聖書にも出て来ますが、「私の骨からの骨、私の肉からの肉」という表現は夫と妻の結婚関係にのみ当てはまるものです。

この一体性は、男と女の違いを通して、より豊かに味わわれ、体験されるべきものでしょう。その点で、女がアダムのあばら骨から取られたこと、アダムの脇から取られたことは大きな意味を持ちます。マシュー・ヘンリーのこのことに関する注解は有名です。彼はこうコメントしています。「エバがアダムの頭の骨から造られなかったのは、エバがアダムを支配しないためである。彼女が彼の足の骨から造られなかったのはアダムによって踏みつけられないためである。そうでなく、彼の脇から造られたのは、彼女が彼と同等の者であって、彼の腕の下で保護されるためであり、また彼の心臓の近くにあつて愛されるためである。」 新約聖書の、この夫と妻の関係はキリストと教会の関係を映し出すべきものであること、妻は夫に従い、夫は妻を愛すべきであるという、あのエ

ペソ書のメッセージが思い起こされるようです。そのような役割の違いをもって、一層豊かな一体性を味わい、また一つからだを形成して行くべきなのです。

そしてこのような夫婦の関係は、それ自身が目的ではないことも覚えるべきです。ここで女は助け手と言われていますが、ただ男がすることを助けるわけではありません。アダムに与えられた使命は、被造物管理の働きです。全世界をあげて神の栄光を現す働きに仕えることです。この根本使命に向かって両者が強められるために、この結婚はあるのです。

最後に短くもう一つのことに触れたいと思います。それはこの結婚は天国にはないということです。イエス様ははっきりと、マタイの福音書 22 章 30 節で「復活の時には人はめとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのようです。」と言われました。そういう意味で結婚は地上的な制度であるということになります。そしてこの結婚は先に触れましたように、キリストと教会の関係を現す雛形・タイプです。これが指し示す本体はキリストと教会の婚姻です。その本体が最終的に現れれば、それを指し示して来た「影」は過ぎ去ります。そういう意味で、結婚は限られた地上の間だけの出来事ですが、私たちの結婚はこの来たるべき偉大な奥義を指し示すものとなるように、と言われていきます。とするならどんなに自らの結婚生活を省みて、この栄えある召命に生きる者となるように、祈り取り組んで行かなければならないということになるのでしょうか。

神は結婚をこのようなものとして定められました。この神の御心の前にかしこみ、この御心に生きる者となることを求めたいと思います。結婚は「ふたりは一体」となるものです。別々の存在が何とか一人の人のようになろうとすることではなく、もともと一つであった男女が、再び一つとなって、一つからだを形成して行くという神秘的なことです。そして互いに支え合い、力を合わせて、一層神に与えられた使命に生きることへとつながって行くべきものです。またやがて明らかに現されるキリストと教会の婚姻を指し示すものです。この神の御心はこの世が続く限り変わりません。私たちがあずかる救いは益々ここに立ち返るものです。そのことを祈り求めて、いよいよこの御心に生きて、神の栄光を現す歩みができますように。そしてそこに神が備えたもう真の幸いを深く味わい知り、神を喜ぶ歩みへ導かれたいと思います。